

「笠沙町の地域振興における宇治群島の活用について」
 — 宇治群島調査の成果報告書（要旨） —

田島 康弘
 鹿児島大学教育学部

Practical Use of Uji Islands in Kasasa Town Development
 TAJIMA Yasuhiro
 Faculty of Education, Kagoshima University

筆者のテーマは、「笠沙町の地域振興における宇治群島の活用について」である。現在、宇治群島の家島には避難港が整備されており、漁船や遊漁船（釣り客の瀬渡船）等の利用がなされている。また、夏には笠沙町の小学生による1泊2日のサバイバルキャンプの実習地として活用されており、町の自然保護条例でも動植物（ビロウ樹、ハマヒサカキなど）の保護地区として指定されている。核処理施設の候補地としての話が突如起ったが、この話は町民により直ちに否定されたことも耳に新しい。

このテーマの下での現地での調査項目として筆者は次のような内容を考えた。

1. まず、現地の状況を筆者自身が確認することが必要であり、とくに、港湾、地形、河川、道路、居住地跡などである。
2. 次に、夏のサバイバルキャンプの追跡確認とその効果の検討である。
3. さらに環境教育、とくに五感体験のフィールドとしての可能性の検討、
4. および、可能な範囲で漁業活動の実態を把握すること、などである。

以下、これらの項目に沿って述べよう。

1. 港湾の状況は無人島にしては大変良好であった。ロープをつなぎ止める鉄の杭が21個設置され岸壁にはクッションのためのタイヤも設置されていた。ただ、潮差が約2メートルもあり、帰りの干潮の際にはこのタイヤに足をかけて船に飛び下りる状況であった。船の入港もかなりあるようで、当日は4隻の入港を確認した。

海岸は断崖が多く、内部に入れる上陸地点は港のある小浦波止と少し南の片浦波止の2カ所に限られており、片浦の方は荒砂の海岸である。どちらもその奥に畑として利用可能な若干の平地があり、とくに片浦には畑の跡と見られる石垣が10カ所ほど見られた。

小浦には小さな水の流れが存在する。この水源は燈台の下の谷で、岩の上面を伝わって水がしみ出していた。海岸付近の水量を、ものを流して流速を計る簡易測定法で概算したところ、 $3200\text{cm}^3/\text{秒}$ の結果を得た。また、小浦では港の南部にも畑地のような平地があり、そこから少量の水が落下していたが、こちらの水量は計測できなかった。片浦の方は平地上の表面水はなかったが海岸部が扇状地状にあり、伏流水が海岸線の近くで4本に分かれて流出していたが、内2本はその水量はわずかであった。多い方の内の1本の水量を同じ方法で計測したところ $120\text{cm}^3/\text{秒}$ だったので、片浦の総水量はこの約2倍の $240\text{cm}^3/\text{秒}$ 程度と推測される。従って、片浦の水量は小浦の水量の10分の1以下であると思われる。

島内の道路は港から避難小屋（通信小屋）周辺の平地道以外は燈台までの階段道のみである。ただ、海岸部以外の内陸部は比較的平坦で樹木もさほど密ではなく下草も低いところが多いので、道がなくても歩けなくはない。

小浦には 1967 年に建設された建物のコンクリート枠が残っており、戸や窓はないが屋根があるので雨はしのげる。この建物の間取りは 8 畳、6 畳、4・5 畳がそれぞれ二間ずつ、3 畳が一間それにトイレ、風呂場があり、あとは玄関と通路である。現状ではいずれも使用不可能だが、大幅に手を加えれば再生は不可能ではないだろう。この建物の手前にも 6 畳二間程度のコンクリート製の建物があり、また、奥には貯水タンクと思われるコンクリート製のものが 2 カ所にあった。

2. サバイバルキャンプについて

港内では波はほとんどないが浅くはない。笠沙で泳力をつけてから臨むのであろうか。釣りは岸壁でも岩場でも至る所で可能である。燈台までのハイキングも階段が整備されている。ただ、小学生には一段の高さがかなり高いところもある。キャンプ地は港の岸壁の上が広いのでここで可能である。ただ、炊事用の水は持参したものを使う方が安心だろう。トイレも船中のもの以外に簡易トイレを作るそうだが十分なものは望めないであろう。星座観測は当日は曇天であったが、晴天であれば絶好の場所と言えよう。

何と言っても無人島であり、その日常と異なる不便な環境が、返って子供達を鍛え、育てる場となり得ることが十分に考えられる。

3. 環境教育の場としての検討

ここでは、1) 陸上の植生、2) 海岸・磯の動植物の 2 つについてのみ検討する。植生の実態については 1953 年の鹿児島大学南産研の調査報告をはじめ、既に幾つかの報告があり、近年調査を行った県立博物館の森田康夫氏も既存の報告以上の新しいことを見つけるのは難しい旨のことを述べていた。燈台を中心とした比較的平坦な島の中央部の樹林の中を南北に歩いた筆者の感じでは、モクダチバナ、ハマビワ、タブノキ、ハマヒサカキなどが多かった。また、草原ではハチジョウススキの中に、リュウキュウチクが既存の報告以上に侵入しているように感じた。土壌は浅いと言われているが、落葉の堆積はかなりあり、必ずしも土地が痩せているとは言えないように思う。総じて樹種が多様であるとは言えないが、これが小さな無人島の特色なのでもあり、こうした特色を体験する場として、環境教育の 1 つの貴重なフィールドと言えよう。

次に、海岸・磯の動植物については干満の潮差が約 2 メートルと大きく引き潮時の磯には海水プールがあちこちに出来、そこには小魚、珊瑚、貝類、ウニ、海藻などの多様な生物が観察できる。この他、磯では何種類のカニ類（岩場、石の下、真水のある陸地でそれぞれ異なるカニを見た）、貝類（多数の生きたホシダカラを見た）、ウニ類などがおり、大変豊かである。磯は環境教育のフィールドとして絶好の場と言えよう。

4. 漁業活動について

ここでは、1) 釣り等による影響、2) 漁船について、の 2 つについてふれる。

釣りの浮子、釣り糸等が海岸の砂場に漂着していた。また、漁業活動の網の 1 部やロープの 1 部などが磯や砂浜に打ち上げられていた。海岸部は決してきれいとは言えない。

漁船については、我々の上陸した1日に4隻の入港が見られた。すなわち、宝水丸、第2拓洋丸、第5千代丸、愛徳丸である。この他、向島方面にも別の3隻を見た。この地区は県下19漁協が加入する「宇治群島漁業協同組合連合会」の漁業権が設定されているが、避難港の利用はこれとは無関係であろう。種子島からの漁船も停泊していた。

報告の概要は以上であるが、実際の活用については、1) サバイバルキャンプ、2) 遊漁船、3) 漁業権設定に基づく漁業活動、という現状をふまえた上で、その活用の拡大、発展を計るべきであろう。宿泊施設の一定の整備は、サバイバルキャンプの一定の充実と環境教育のフィールドとしての活用の促進につながるであろう。